

日本建築における色彩

濱 島 正 士

はじめに

1. 古代の寺院建築

2. 中世の寺院・神社建築

3. 近世の神社・霊廟建築

論文要旨

日本の寺院・神社の建築には、装飾の一環として各種の塗装・彩色がされている。何色のどんな顔料がどのような組合せで塗られているのか、それは建築の種類によって、あるいは時代によってどう違うのか、また、建築群全体としてはどのように構成され配置されているのだろうか。これらの点について、古代・中世はおもに絵画資料により、近世は建築遺例により時代を追って概観し、あわせて日本人の建築に対する色彩感覚にもふれてみたい。

はじめに

日本の寺社建築には色を塗ったものが多い。それは、赤と白を基調として一部に黄・緑や黒を加えたもの、黒又は赤の漆を基調として一部に多彩な色を加えたもの、あるいは金色を主としたものなど、いろいろな組み合わせがある。また、内部でも一部又は全体に多彩な色で文様や絵画を描いたものがある。こうした寺社建築の色彩は、時代によってあるいは建物の種類によってどう違うのか、また伽藍・社殿等の建物群を全体として見た場合、各建物の色彩がどのように構成され配置されているのか、などについて時代を追って概観し、あわせて日本人の建築に対する色彩感覚にもふれることとする。なお、ここでは外部の色彩に限定し、内部についてはふれない。

1. 古代の寺院建築

中国・朝鮮半島から日本へ寺院建築が伝えられたのは、記録の上では6世紀後半のことであり、以来寺院建築では赤と白を基調とした色を塗るのが普通であった。現存する古代・中世の建物で、現在は色を塗らない素木のように見えても、よく調べてみると、かつては色を塗っていたことが知られる例は多い。これらの塗装は、単に装飾のためだけでなく木材の風蝕を防ぐためでもあるが、数十年ごとの塗り替えが必要であり、これを怠るとやがては跡形も無く消えてしまう。色の塗り方は、軸部・組物・軒・妻飾の主要部材や扉・縁・高欄などは赤色、壁や組物・軒・妻飾等の板類は白色とし、組物の肘木・桁や垂木・隅木等の木口には黄色、連子窓には緑色を塗るのが一般的である。黄色はともかく、赤・白・緑の配色は鮮やかなコントラストを示し、古代・中世の建物が修理されて塗装が復旧された場合、時として現代人が抱く古建築のイメージと異なったものとなる。

このような赤と白を基調とした鮮やかな色彩は、もちろん中国・朝鮮半島から伝えられたものであり、日本では仏教文化の一環としてそのまま受け入れたものと思われる。赤色は、中国では高貴な色として尊重されて寺院建築にも用いられたといい、伝来当初はその構造形式と共に異国情緒あふれるものであって、素木の住宅等が建ち並ぶ京内や緑豊かな郊外では、寺院の存在を主張するにふさわしい色彩であったのだろう。色彩の顔料としては、赤色は弁柄・丹・朱があるが、朱は高価であるため、建築のように広い面積を塗るにはあまり使われなかったと思われる。白色は、土壁では古くは白土が多く用いられ、板類には胡粉が用いられた。黄色は黄土、緑色は緑青である。建物外部のこうした塗装は、数十年の周期で塗り替えが必要であるため、残された古代の建築をみても建立当初の仕様が伝えられているかどうか明らかにすることはむずかしい。したがって、ここでは絵画資料その他によってみることにする。

寺院の伽藍が描かれている絵画のうち奈良時代唯一の遺品である「額田寺伽藍並条里図」をみ

ると、額田寺の伽藍には南門・中門・金堂・三重塔・講堂・鐘楼・鼓楼・僧房などの主要建物が姿図で描かれている。それらは、いずれも軸部・組物・軒・扉等が赤色塗料で描かれており、その顔料は鉛丹であることが報告されている。⁽¹⁾ 屋根は墨で描かれ、壁等は何も塗られていない。小さくて簡単な図であるから、それ以外の色の使い分けはされていないが、当時の額田寺では主要建物が主として赤色で塗られていたことが知られる。ただし、顔料については図と同じく鉛丹であったのか否かは判らない。飛鳥・奈良時代の寺院跡から出土する軒先瓦のなかには裏側に弁柄の付着したものがあり、⁽²⁾ それらは瓦を葺いてから建物に塗装を施した際に付着したものと考えられることから、普通は弁柄が用いられたものと思われる。

次に、平安時代末期の制作になる絵巻『信貴山縁起』や『年中行事絵巻』についてみると、前者では東大寺大仏殿・内裏待賢門や小祠が描かれていて、木部は主として赤色、桁や垂木の木口は黄色に塗られ、小祠では破風の上端が黒く塗られている。また後者では、神社のほか大極殿をはじめ大内裏の役所向の門・廊などは同様の塗装がされており、床・縁の板も黄色に塗られている。⁽³⁾ 連子窓には茶色のような色が塗られているが、これがもとの色なのかどうかは判らない。

以上のように、奈良・平安時代については絵画資料も僅かしかなく、当時の寺院建築等の塗装を正確に知ることはできないが、遺例に見るような木部に赤色を主とした塗装がされていたことは確かであろう。

ところで、前記絵巻にみえる小祀や神社では寺院と同様の塗装がされているし、春日大社や宇佐神宮・石清水八幡宮など奈良時代末から平安時代初めにかけて創祀された神社でも、現在の社殿は同じように塗られているが、日本古来の神社すなわち寺院建築伝来以前の神社はどうであったのか。もちろん当時の建物は残されていないが、古い形式を伝えている伊勢神宮や仁科神明宮などの神明造、出雲大社や神魂神社などの大社造についてみると、外部は色が塗られておらず素木のままである。神が常住するこれらの神殿では木材や屋根茅が自然の色をそのまま見せており、おそらく当時の宮殿や住宅と同じであったのだろう。『年中行事絵巻』に描かれた院御所（法住寺殿）や貴族の邸宅、紫震殿をはじめ内裏の殿舎なども同様に素木である。これらの神社では後世でも神仏習合を許さなかったこと⁽⁴⁾で判るように、きわめて伝統性が強い⁽⁴⁾ため古来の素木の手法が現在まで守られてきたものと考えられる。

2. 中世の寺院・神社建築

(1) 寺社絵図に描かれた建築

鎌倉時代になると寺社の境内絵図や縁起絵巻の遺品が多く、詳細に描かれたものもあって、各建物の塗装をもう少し詳しく知ることができるとともに、伽藍・社殿全体としての色彩の構成や配置を知ることができる。

まず寺院についてみると、「称名寺絵図」（1323年）では建物1棟ごとの細かい色の塗り分けは

判らないが、全体としては南北中軸線上の中門・金堂・講堂と鐘楼，西側の新宮（鳥居・拜殿・本殿・摂社）・三重塔，東側の雲堂・庫院，それに講堂・雲堂間の回廊，東のはずれの高台にある骨堂などが赤く塗られており，ほかは素木にみえる。ここでは方丈はもちろんのこと僧坊や兩界堂・護摩堂なども素木になっている。方丈が素木であるのは，客殿あるいは住職の住房という，住宅的要素をもつ建物だからである。

『一遍上人絵伝』（1299年）には善光寺・四天王寺・金剛峰寺・円教寺・甚目寺などが描かれていて，いずれも色が塗られている。四天王寺では主要堂塔が赤・白・黄（縁板と垂木木口）・緑（連子窓）の各色で塗られているし，金剛峰寺でも壇上伽藍の大塔・金堂・灌頂堂・鐘楼・鼓楼には同様の色が塗られていて，そのうち灌頂堂の蔀戸が黒く塗られているのは漆塗りを表したものであろう。薬師堂その他は素木であるが，蔀戸だけは黒い。一方，善光寺では南大門・五重塔・鐘楼・鎮守社が赤・白・黄・緑（連子窓と金剛柵）色で塗られているが，本堂・回廊・中門などは素木のままである。円教寺でも楼門・五重塔には色が塗られているのに本堂は素木であるし，甚目寺も楼門・塔・鐘楼は塗られているものの本堂は素木である。このように，同絵巻に描かれた寺院をみると，主要堂塔のすべてに色を塗るものと，門・塔・鐘楼などには色を塗るのに肝心の本堂は素木にするものとおおよそ2通りに分れる。

つぎに，同じ『一遍上人絵伝』に描かれた神社としては，熊野の新宮・那智社・本宮，三島社，美作一の宮，石清水八幡宮，備後一の宮，岐島神社，大山祇神社，天神社などがある。このうち，岐島神社では拜殿・回廊・本殿などすべてに寺院と同様の色が塗られているし，三島社は少し変わった社殿配置ながら楼門・回廊・拜殿・幣殿・本殿及び後方の摂末社など主要社殿には色が塗られている。しかし，備後一の宮では楼門・築地と本殿には色を塗るものの，舞殿・拜殿・回廊は素木のままであり，大山祇神社や天神社でも楼門・回廊（天神社は楼門・回廊がない）と本殿には色を塗り拜殿は素木である。熊野の三社もほぼ同様であるし，石清水八幡宮も楼門・本殿と回廊より外の摂末社・塔・鐘楼には色を塗り，幣殿・舞殿・回廊その他の付属屋は素木である。したがって，同絵巻に描かれた神社には，建物の種類や配置は異なるものの主要社殿にすべて色を塗るものと，主として楼門・本殿には色を塗り拜殿や幣殿は素木にするものとおおよそ2通りがある。

『一遍上人絵伝』は寺社の各建物の描き方が必ずしも史実⁽⁵⁾に合わず，一部パターン化されたところもあるようで，絵巻制作当時の各寺社の色彩の状況をそのままには伝えてはいないかもしれない。しかし一般論としては，当時の寺院・神社の伽藍・社殿では上記のようなそれぞれ2通りの塗り分けが広く行われていた，とみてもよいのではなかろうか。寺院において，主要伽藍すべてに赤を基調とした色を塗るのは中国・朝鮮半島伝来の手法を守ったものであるが，一方で肝心の本堂に色を塗らないのは，国風化によって日本古来の手法（松皮など植物性の材で屋根を葺く，床を張る，蔀戸を用いるなど）が取り入れられたこと，元来はすべてが仏のための空間であった堂内に礼拝する人のための空間を取り込むという質的变化が起ったこと，などに起因するものと

も考えられる。それに対して楼門・塔・鐘楼などに必ず色を塗るのは、これらの建物がもともと伽藍を構成する上での形式的な要素をもつものであり、機能が重視される本堂とは違い、時代が下っても質的に大きな変化はなかったからであろう。

また、神社のうち寺院建築伝来後に創祀された神社あるいは創建された本殿形式をもつ神社では、当初から寺院と同じように主要社殿に色が塗られたであろうことは、建築の形式や手法に寺院建築の影響を多分に受けていること、および神仏習合が早くから広まったことから容易に推察される。一方、本殿などには色を塗るのに拝殿あるいは幣殿を素木とするのは、本殿が神のみの空間であるのに対し拝殿・幣殿は人の礼拝空間であることによるものかと思われ、仏のためだけの空間であった金堂には色を塗り、礼拝空間を内部に取り込むようになった本堂には色を塗らないことと共通する点があるのだろう。

『松崎天神縁起』（1311年）をみても、完成した同社の社殿は楼門（拝殿を兼ねる）と本殿・撰末社・三重塔・鐘楼には赤・白・黄・緑の色が塗ってあり、幣殿・回廊・瑞垣などは素木である。「祇園社境内絵図」（1330年）では楼門（南大門・西大門）・神殿・撰末社の本殿・大塔・鐘楼に色が塗られており、中門・廊・舞殿・撰末社の拝殿・仮殿・薬師堂などは素木である。細かい点では異なるものの、本殿と楼門・塔・鐘楼には色を塗り幣殿や舞殿を素木とする塗り分けは、大筋では前にみた『一遍上人絵伝』の后者のパターンと同じである。

ところで、石清水八幡宮については宮曼荼羅が何点か残されていて、そのうち最も細密に社殿が描かれている根津美術館本（室町時代）をみると、『一遍上人絵伝』の同社殿とは少し違っていて若宮拝殿と馬場殿を除いてはすべてに色が塗られている。中世の石清水八幡宮社殿で舞殿・幣殿・回廊に色が塗られていたのか否かについては、他に確かめる資料がないが、描かれた社殿の状況は根津美術館本の方が史実に近いと考えられるし、寛永11年（1634）に再建された現社殿⁽⁶⁾ではすべてに色が塗られている。

室町時代の境内絵図や縁起絵巻をみてもほぼ同じである。『桑実寺縁起』では三重塔と鎮守社だけに色が塗られており、本堂・鐘楼・門その他の建物は素木で、本堂の蔀戸は黒く塗られている。この絵巻が制作されたのは天文元年（1532）のことで、南北朝時代に建立された現在の本堂を見て絵を描いた可能性が高い。⁽⁷⁾ 現本堂は建具が江戸時代に改変されていたため蔀戸の塗装については知ることができないが、ほかはもとから素木のようなようである。

（2）都市図に描かれた建築

つぎに、個別の寺社の絵図・絵巻のほか、都市図に描かれた寺社の色彩がどうなっているかをみてみよう。京都の町並を描いた洛中洛外図屏風のうち室町時代後期に制作された歴博本（旧町田本）と上杉本では、意外と色を塗った寺社は少ない。歴博本で明らかに赤色を塗っているとみられるのは三十三間堂・清水寺の塔と門・八坂の塔・吉田神社・上賀茂神社・今宮神社・相国寺三門・嵯峨釈迦堂・北野天満宮の末社・平野神社・松尾神社・誓願寺の鐘楼・百万遍の鎮守く

らいである。上杉本では歴博本より寺社の建物がいくらか多く描かれており、色を塗ったものも少し増えて、東福寺の三門・三十三間堂・清水寺の塔2基・東寺・八坂の塔・稲荷の御旅所・八坂神社・閻魔堂・五条天神・南禅寺・等持院・御霊社・吉田神社・鞍馬寺の門・今宮神社・上賀茂神社・大徳寺の仏殿・平野神社・相国寺・嵯峨釈迦堂の塔と鐘楼・天竜寺・臨川寺の山門・百万遍の鎮守・松尾神社・広隆寺塔のほか、神社・鎮守のほとんどが赤く塗られている。このうち、南禅寺と相国寺では組物・軒・妻飾は赤色であるが軸部や扉・火灯窓は黒色で、天竜寺・臨川寺の山門もほぼ同様である。葺戸など建具を黒く塗った例は前項の絵巻などでも見られたが、軸部を黒く塗る例は見当らない。中世の京都の禅寺ではそのような塗装が行われていたのであろうか。歴博本と比べると、清水寺本堂・北野天満宮本殿などは同じように素木であるが、歴博本では素木であった八坂神社・南禅寺が赤く塗られている。相国寺も歴博本では三門にしか色が塗られていないが、上杉本では方丈以外はすべて塗られている。

歴博本と上杉本では制作年次に数十年の差があるとされており、両本に描かれた同じ寺社の建物が同一でない可能性があるし、同一建物でも数十年の間の修理によって塗装されたり、経年変化により色が落ちて素木に近くなったりしたかもしれない。したがって、両本に描かれた同じ寺社について個々に色の有無を比べてみても、あまり確かなことは判明しない。それに、これはあくまでも絵画であり、しかも個別の寺社境内絵図とは制作の目的も違う。広く知られた寺社が、あるべき所にそれらしく描かれていればよいことで、個々の建物まで正確に写したわけでもなく、類型化して描かれたものもあろう。また、個々の建物が描かれたとしても、色まで実物どおり塗ったとはいえない。事実、三十三間堂・八坂塔・東福寺三門などは両本が制作された当時の建物が現存するが、三十三間堂と八坂塔には色を塗った跡があり、東福寺三門にはない。したがって、これらの都市図については、個別の事実を写したというよりは、絵師の、ひいては当時の人々の寺社の建物に対する一般的な概念が写されている、といえるのではなかろうか。そこで、歴博本と上杉本にみられる寺社の建物の色彩に対する概念をあげてみると次のようになる。

1. 神社（本殿）は赤く塗ること。

ただし、八坂神社は歴博本では素木、上杉本では本殿・舞殿・門とも赤く塗っているが、実際は前記「祇園絵社図」のように本殿や楼門などは赤く塗り、舞殿などは素木としていたのではなかろうか。両本が制作された当時の本殿（1492年建立）については正保2年（1645）修理時の記録によると丹塗りであったらしい⁽⁸⁾、舞殿は現在のものが素木である。

2. 塔も赤く塗ること。

塔に赤を主とした色を塗ることは、前項の寺社絵図がそうであったし、遺例を見てもたいていはそうになっている。

3. 相国寺をはじめ臨済宗の大寺に塗装がみられること。

現在の禅宗寺院をみると、色が塗られているのは大徳寺三門（1529～89年）くらいで、素木とするのが普通である。しかし、上杉本では相国寺と南禅寺のすべての建物、東福寺・天竜寺・臨

川寺の各三門に色が塗られていて、とくに相国寺・南禅寺の塗装は色鮮やかであり、全くの絵空事とは思えない。なお、「三聖寺伽藍図」(室町時代)でも主要建物は赤く塗られている。

4. 知恩院・百万遍・誓願寺などの浄土宗寺院は素木であること。

現在の浄土宗寺院も同様であって、素木とするのが普通と思われ、事実にも合う。浄土宗などの念仏諸宗では祖師の住房を寺院とすることから始まっていて、他宗とは寺院の成立過程が異なる⁽⁹⁾ことによるものであろう。

(3) 遺例にみる塗装・彩色

ところで、現存する中世の建物をみると、赤・白・黄・緑色を単色で塗るだけではなく、多彩な色を使って文様等を描く彩色を施したものがある。建物の内部に極彩色(多くの色や金箔を用いた華麗な彩色)で文様等を描くことは、奈良時代の法隆寺金堂・五重塔、薬師寺東塔などの母屋の天井回りにみられ、おそらく寺院建築伝来当初から伽藍の中心建物では本尊を荘厳するために行われたものと考えられる。唐招提寺金堂ではこうした彩色が内部に残されているほか、外部組物の軒支輪や一部の柱上部にも痕跡がみられるが、外部の彩色については建立当初のものかどうかなど詳しいことは判らない。建物内部に極彩色を施すことは平安時代になってさらに発展する。醍醐寺五重塔(951年)では初重内部全面に金剛界・胎藏界の曼荼羅や真言八祖像、装飾文様などを極彩色で描き、密教の世界を構成しているが、このあとの密教の塔には同様の彩色を施したものが多し。また、平等院鳳凰堂(1053年)をはじめ平安時代後期の阿弥陀堂では、堂内全面に仏画や装飾文様を極彩色で描き、極楽浄土の情景を創り出そうとしたものが多し。このような建物内部に極彩色を施すことは、中世以降本堂や塔以外の建物にも広がっていく⁽¹⁰⁾。

一方、建物外部の極彩色は、唐招提寺金堂を別にすれば墓股などの彫刻類に施したのが最初らしい。現存する建物では、浄土寺多宝塔(広島・1329年)で墓股内部の彫刻に極彩色が施されているし、向上寺三重塔(広島・1432年)では簀束・絵様肘木・持送に緑青や群青を主とした彩色があり、ほかには赤・白・黄と黒(尾垂木の眉、木鼻の渦)色を塗っている。大威徳寺多宝塔(大阪・1515年頃)でも墓股・簀束・拳鼻・持送の彫刻類に緑青を主とした彩色を施している。緑青を主とするのは、赤や白との対比が鮮やかであり、かつ連子窓と色調を揃えたものであろう。これらの彩色が建立当初から塗られていたかどうかは明らかでないが、鎌倉時代以降墓股や持送など装飾的な彫刻類が用いられるようになり、それらに極彩色を施して目立たせたのではなかろうか。その後は、彫刻類だけでなく次第に組物や柱頭部にも広がっていく。

同様の例は現存する室町時代の神社本殿にもみられるが、それらもまた建立当初からなのかどうかは明らかでない場合が多い。その中で、近年の修理時の調査によって、建立後の早い時期にすでに彩色が行われていたとされる例をあげる。戸隠神社本殿(兵庫・1524年)は一間社春日造の形式をもち、柱頭部や墓股・庇木鼻・庇桁隠などの彫刻に赤・緑・青・白・黒色の彩色を施し、ほかには丹・胡粉・黄土を通例どおり塗っている⁽¹¹⁾。豊歳神社本殿(兵庫・1511年)も一間社春日造

で、柱頭部から組物・桁にかけて彩色を施し、壁板は胡粉下地に植物や動物の彩画を描き、ほかは赤（弁柄）と白色を塗っている。庇の柱頭から組物へかけてと身舎の木鼻は緑青を主とした彩色である。⁽¹²⁾このように、両本殿は一部に極彩色を施した比較的古い例であるが、彩色はいずれも緑色が主で、赤・白・緑の対比が鮮やかであり、この点は従来の塗装と感覚的に近いといえる。

3. 近世の神社・霊廟建築

(1) 丹・弁柄塗りと彩色

前にも述べたように、建物外部の塗装や彩色は建立以来何度も塗り直されているから、現在の建物の色彩や顔料・技法が建立当初と同じなのかどうかは、近世の建物でも明確でない場合が多い。そこで、建立時の造営文書によって社殿全体の当初の塗装・彩色の状況が判る例を最初にあげておこう。岐阜県の南宮神社は寛永19年（1642）に大規模な造営が行われたが、その時の建物が15棟残されており、さらに神宮寺の建物3棟（本地堂・三重塔・鐘楼）も近くの真禅院に移されて現存する。これらの建物について、造営文書のうち「彩色入札」により各建物の外部の塗装・彩色（内部は省略する）⁽¹³⁾の概要をみると次のようになる。

本社 藁股・尾垂木鼻・妻笈形・木鼻・手挟・持送は極彩色。ほかは素木。

本社拝殿 藁股・妻笈形・持送・内法長押・柱上部極彩色。木口緑青，柱・貫・組物・丸桁・軒回り・妻回り丹，嵌板・格子・琵琶板胡粉塗り。

摂社四社 藁股・持送・手挟・内法長押・庇組物極彩色。木口緑青，嵌板・小壁胡粉，その他丹塗り。

四社拝殿 内法長押上丹，嵌板・小壁・裏板胡粉，木口黄土塗り。

七王子社 嵌板・小壁・裏板胡粉，木口緑青，その他丹塗り。

回廊 藁股極彩色。連子・垂木木口緑青，梁の眉黄土，嵌板・小壁・裏板胡粉，その他丹塗り。

高舞殿 藁股・持送極彩色。木口・緑青，嵌板・裏板胡粉，その他丹塗り。

楼門 藁股・持送極彩色。垂木木口黄土，その他木口緑青，嵌板・小壁・裏板胡粉，その他丹塗り。

本地堂 藁股・持送・内法長押・柱上部極彩色。嵌板・裏板・格子裏板胡粉，木口・軒支輪緑青，その他丹塗り。

鐘撞堂 柱・地覆は素木。間斗束彩色。梁の眉・木口緑青，垂木木口黄土，小壁・裏板胡粉，その他丹塗り。

また、「三重之塔注文」によると三重塔は次のとおりである。

三重塔 柱・組物・軒回り・縁・高欄丹，連子緑青塗り。長押彩色。

これでみると、本殿は彫刻類を極彩色とするだけではかはすべて素木としているのに対し、他

の建物は彫刻類を極彩色としてほかは丹・胡粉・緑青又は黄土を塗っていて、本殿だけをほとんど素木とする点が変わっている。また、垂木等の木口を緑青塗りとするものと黄土塗りとするものとがあって、緑青塗りの方が多い。勅使殿・神官廊・集合所（現神輿所）については記載がないので、いずれも全体が素木だったのであろう。なお、七王子社を除く摂社四社の拝殿は現存しない。ここで、勅使殿・神官廊・集合所の3棟を素木とするのは神のための建物ではなく人が使うための建物であるからと思われるが、本社本殿をほとんど塗らないのは他の多くの社殿と明確に区別するためであろうか。現在の建物をみると、以上の塗装・彩色を比較的好く踏襲しているようであるが、木口の緑青塗りはどこにもみられない。黄土に比べると緑青の方が高価であるため、いつの時代か木口は黄土塗りに統一されたものであろう。また、本殿の彩色は、僅かに跡をとどめているだけである。

（2） 漆塗りと極彩色

近世になると寺社建築の色彩が大きく変ぼうする。中世から行われていた彩色の範囲が広がって華やかさを増すと共に、弁柄・丹・朱の赤、胡粉の白、黄土の黄、緑青の緑といった岩絵具系の顔料による塗装のほか、黒や赤の漆を使った塗装が広範囲に行われるようになったことである。漆による塗装は、寺社建築では奈良時代から堂内の厨子や須弥壇などに行われてきた。単純な黒漆だけではなく、例えば中尊寺金色堂（1124年）では金銀の蒔絵や青貝を嵌め込んだ鏤鈿が母屋回りに施され、庇回りは金箔を張った漆箔としている。しかし、一般に漆を建物外部に塗るようになったのは近世以降のことらしく、豊国廟（1599年）が最初ではなかろうか。

豊国廟は建立後数年で取り壊されたが、一部の建物が滋賀県の竹生島へ移され、都久夫須麻神社本殿の母屋及び宝厳寺の唐門として残されたとみられている。前者は方三間の建物で、柱・内法長押・扉框に黒漆を塗って草花の金蒔絵を施し、上長押から組物・丸桁にかけてと欄間・扉板の彫刻とを極彩色とし、随所に鍍金の飾金具を打っている。黒色の部分にも蒔絵の金色が光るので、なかなか華やかである。後者は向唐門で、主要部材を黒漆塗とし、壁面や扉板を埋める唐草などの彫刻類には極彩色が施されている。飾金具は鍍金されていたのであろう。本願寺唐門（17世紀初）も宝厳寺唐門と同じような塗装・彩色がされた四脚門である。このように、黒漆塗りを主としてこれに極彩色を加えた建物はほかにも多い。大崎八幡神社本殿幣殿拝殿（1607年）は複合社殿のいわゆる権現造の形式をもち、長押から下の軸部と軒先の茅負・裏甲及び妻飾、屋根の箱棟等に黒漆を塗り、内法長押から丸桁にかけては極彩色を施し、軒の垂木には赤漆を塗っていて、黒を基調とした中に組物の極彩色や垂木の赤が浮び上っている。一方、同じような権現造の形式をもつ北野天満宮本殿石の間拝殿（1607年）は、破風や妻飾に赤・黒の漆を塗っているものの素木が主で、彫刻類に極彩色を施しており、先述の南宮神社本社に近い配色である。

権現造の祖ともいべき久能山東照宮本殿石の間拝殿（1617年）は、黒漆を主とするものの赤漆もかなり目に付く。柱・長押・軒回り・妻飾・建具類に黒漆、縁・高欄回りと拝殿向拝柱には

赤漆を塗り、内法小壁から組物・丸桁にかけては極彩色（ただし軒支輪は黒漆）を施し、随所に金箔又は鍍金の飾金具を打っている。赤漆塗りの部分は少ないがかなり目立ち、屋根が銅瓦葺であることも作用して大崎八幡神社社殿より華やかで重厚な感じがする。

これらの塗装・彩色が各建物の建立当初からのものであるかどうかは、都久夫須麻神社本殿を除いては明らかにしえない。都久夫須麻神社本殿の場合は、おそらく豊国廟の霊屋として建てられた3年後に移されて当本殿の母屋とされたもので、その後は周囲に庇が回っているためほとんど風雨に晒されることはなく、建立当初の塗装・彩色が残されたと考えられる。久能山東照宮社殿については、寛文12年（1672）の修理記録に「御宮廻り土朱塗」とあり、また天和2年（1682）の修理では「御宮廻りうるし朱塗」と記録されているから、以前は赤色が主で、しかも初めは漆塗りではなかったらしい。⁽¹⁴⁾ そうだとすると、極彩色の範囲が明らかではないものの、中世以来例の多い塗装・彩色に近くなり、現状とは随分違ったものとなる。

豊国廟や東照宮といったいわゆる霊廟建築は死去した権力者を神格化して祀ったもので、権威の象徴として人々の目を奪う豪華華麗なものであることを必要とした。こうした霊廟建築の存在が神社等の建築にも多くの影響を及ぼしたと考えられる。

以上は黒漆を基調としたものであるが、現存する建物でみるとむしろ赤漆を基調としたものの方が多い。これは中世から行われていた弁柄・丹などの岩絵具系の塗料を漆に変え極彩色の部分を増やしたものと考えられ、二荒山神社本殿（1619年）がその代表的な例である。同本殿は孫庇・向拝付入母屋造の形式をもち、柱・壁板・軒回り・縁・高欄は赤漆、建具類と破風には黒漆を塗り、内法長押・柱頂部から組物にかけてと妻飾は極彩色で、彫刻類は一部を生彩色（漆箔の上に要所に彩色する手法）としている。しかし、赤漆（弁柄漆）は後世塗り変えられたもので、⁽¹⁵⁾ 建立当初は丹塗りであったらしいから、建立当初の久能山東照宮と同じようなものであったのだろう。同じ日光の東照宮にも赤漆塗りを主としたものは多く、表門・上中下の三神庫・経蔵・回廊（いずれも1636年）などがそうである。表門は柱・斗拱・扉などに朱漆を塗り、垂木・破風板などが黒漆塗り、頭貫・台輪・蟻股・丸桁・妻虹梁などが極彩色、木鼻など彫刻類が生彩色であり、その他の建物も部分によって塗装・彩色の塗り分けは異なるが、主に軸部を赤漆塗りとし、これに黒漆・極彩色・生彩色などを加えた点は似たようなものである。

愛知県岡崎市に所在する伊賀八幡宮本殿幣殿拝殿と六所神社本殿幣殿拝殿はともに本殿を流造とした複合社殿の形式をもち、建立年代も同じ寛永13年（1636）である。両社とも本殿と幣殿・拝殿の塗装・彩色が異なり、幣殿・拝殿は丹塗りを主として破風・妻飾・建具・高欄等に黒漆を塗り、組物・彫刻類に彩色（六所神社の斗拱は丹塗り）を施しているのに対して、本殿は黒漆塗りが主で、軒回り・縁回りを伊賀八幡宮は丹塗り、六所神社は赤漆塗りとし、柱頭部から組物・丸桁にかけてと妻飾に彩色（軒支鬚と破風板は黒漆塗り）を施している。両社殿は本殿の軒回り・縁回りの顔料が異なるものの色はほぼ同じで、ただ拝殿・幣殿の斗拱が彩色か丹塗りかの違いだけである。このように、両社は複合社殿でありながら本殿と拝殿・幣殿の色を変え、本殿の

方は黒を基調としながらも華やかな彩色を増やしており、前述した大崎八幡神社社殿などと似たところがある。なお、両社殿にはほかに楼門と御供所が残されていて、ともに楼門は赤色を主として藁股に彩色を施し、御供所は藁股のみ彩色をしてほかは素木のままである。両社では、楼門と幣殿・拝殿は赤を基調として少し彩色を加え、本殿は黒を基調として彩色を増やし、脇にある御供所は素木に彩色を少し加えただけという、色彩の上でも3段階のランク分けを行い変化を付けている。

ほかにも、赤漆を主にした例は多いが、その中には二荒山神社本殿のように、建立当初は丹や弁柄を塗っていて後世漆に塗り変えたものが、とくに近世初めの建物にはかなりあるのではないかと思われる。

(3) 金箔その他と極彩色

つぎに、金色を基調にして黒・赤の漆塗りと極彩色を加えたものとしては日光の大猷院靈廟本殿相の間拝殿（1653年）がある。同社殿は柱・妻虹梁・破風板・木負・茅負・裏甲等は漆箔、頭貫・台輪・丸桁等が漆箔または生彩色、組物は本殿の本屋が極彩色でほかは黒漆（面箔付）、垂木は本殿が朱漆、拝殿・相の間が黒漆、壁板と縁回りが黒漆（腰組は面箔付）、高欄が朱漆である。建具は板扉と棧唐戸・葎戸の棧が黒漆、火灯窓の枠が朱漆で内部の彫刻は生彩色、そのほか彫刻類はほとんどが生彩色である。このように同社殿は漆箔と生彩色の金色が主体で、それに黒漆と朱漆が加わり、全体としては金色の中に緑・青・赤などの色が混ざって見える。きわめて豪華な装いではあるが、色彩としてはややコントラストに欠けるきらいがある。ここでは軒と組物の塗装・彩色を変えて本殿と相の間・拝殿を区別しており、先に見た伊賀八幡宮や六所神社と似た扱いになっている。これらの塗装・彩色については、貞享4年（1687）の古図によって、ほぼ当時の手法が伝えられていることが知られるという。⁽¹⁶⁾金色を主とした例としては、このほかに上野東照宮本殿幣殿拝殿（1651年）がある。同社殿は軸部と軒裏板が漆箔で、縁回りは赤漆、高欄と垂木は黒漆、組物・丸桁は極彩色、彫物類は生彩色である。

ここで、大猷院靈廟の各建物の塗装・彩色が全体としてはどのように構成されているのかを、建物の配置に従って入口から順に見てみよう。最初の仁王門（八脚門）は主として軸部が赤漆、組物から上が黒漆で、軸部につながる両側の袖扉はほぼ黒漆である。仁王門左手の宝庫はほとんどが赤漆で建具だけを黒漆としている。仁王門から延びる参道は左に折れ石段を上って二天門（楼門）に至るが、曲角右手にある手水舎は軸部が石造で、組物は極彩色、軒・妻飾は主として黒漆を塗っており、石の白さが目に付く。二天門は1階が軸部赤漆、組物黒漆、2階は軸部赤漆、組物極彩色、軒は黒漆で、正面の軒唐破風と側面の妻飾は生彩色であるがほとんど金色に見える。1階は仁王門と同じ配色であるが、2階は極彩色と金箔を加えてより複雑、豪華に仕上げられている。

二天門を通過してすぐ右に折れて石段の途中で左に折れ、鼓楼・鐘楼（袴腰付）を左右に見て夜

又門（八脚門）に至る。鼓楼・鐘楼は袴腰から軸部にかけて黒漆が塗られ、組物は極彩色であるが軒・妻飾はまた黒漆で、総体に黒っぽく渋く仕上げられている。鐘楼手前の右手奥に見える西浄は、宝庫と同じくほとんど赤漆一色である。夜叉門は主として軸部が赤漆、組物が金箔、軒は赤漆で軒唐破風と妻飾はほぼ金色で、赤と金が主であるが、頭貫が緑青で塗られていてこれがよく目立つ。二天門で上方に少しみられた金色が、ここでは随分多くなる。夜叉門の左右に連なる回廊は赤漆が主であるが、連子窓の緑青が目立ち、門と調子が揃う。

夜叉門正面の拝殿前唐門はほとんどが金色で、わずかに軒・扉の一部が黒漆、彫刻類が極彩色である。唐門の左右から出て拝殿相の間本殿を囲む瑞垣はおもに黒漆塗り、格子に緑青が塗られ彫刻に極彩色が施されている。先述のように、拝殿相の間本殿は下重は軸部が主に金色で縁腰組と組物・軒を黒漆塗りとし、横一直線の縁上の高欄の赤がアクセントとなる。一段高い本殿の上重は組物を極彩色、軒を赤漆として下方と区別している。このように、唐門から中は金色に光り輝き、周囲の瑞垣は黒くおさえられて中心部を浮き立たせるための効果がある。左手背後の御供所はほとんどが赤漆で、最初の宝庫、途中の西浄と共に中軸外の付属建物としての立場をよく示しているといえよう。

本殿の右手から奥院へ上る参道がある。最初の皇嘉門（竜宮造）は極彩色や黒漆が使われているものの、袴腰や丸桁・妻虹梁の白色が目立つ。奥院への入口を明示しているのであろう。そこから奥は右手へ折れると奥院拝殿、左手へ折れると銅包宝蔵へ至るが、いずれも黒漆が主で、廟塔周辺のひそやかな雰囲気と溶け込んでいる。

以上見てきた建物とやや趣きを異にするのが日光東照宮の本殿石の間拝殿、唐門、陽明門及び坂下門（いずれも1636年）である。この4棟はいずれも胡粉塗りの白色を基調として、漆箔の金色と漆の黒色に極彩色が加わる。本殿石の間拝殿についてみると、柱・貫・頭貫・内法長押・台輪と壁面の一部を胡粉塗りとし、組物・軒回り・縁回りと蔀戸等は黒漆塗りで組物は面箔付、丸桁は極彩色、妻飾や彫刻類は生彩色、破風板は漆箔である。このほか随所に鍍金の飾金具が打たれているから、全体としては白・黒・金の3色の間に緑・青・赤色などが垣間見えることになる。陽明門も似たようなものであるが、唐門は胡粉塗りの部分が多くてそれに唐木が象眼され、黒漆のほかに朱漆が加わる。

日光東照宮では、前述のように表門・三神庫・経蔵・回廊などは赤漆塗りを主としてそれに華やかな極彩色が加えられており、鼓楼・鐘楼も袴腰や軒回りは黒漆であるが、組物・縁腰組の彩色の赤色が目に付く。それらの建物を過ぎて陽明門に至ると、雰囲気は一変し、白・黒・金の3色が主で、よく見るとその間に赤・緑・青の鮮やかな色が混ざっており、華やかさの中にも清楚さが感じられる。しかし、近年の調査研究によると、本殿石の間拝殿・唐門・陽明門などの胡粉塗りの部分は後世の修理に塗り変えられたもので、もとは柿渋を塗って鉄漿をかけ、その上に石灰を摺り込んだものではなかったかと考えられている。⁽¹⁷⁾「渋鉄染石灰摺」とも称されるこの技法は、妙義神社唐門（群馬・1756年）に用いられており、やや赤味をおびた透明感のある茶色に、

木材の夏目に摺り込まれた白色が浮き出るといった仕上りになる。また、鼓楼・鐘楼も極彩色の頭貫・台輪・組物が建立当初は黒漆塗であったらしい。⁽¹⁸⁾日光東照宮の本殿石の間拝殿など4棟がこうした塗装に復原されると、金色・黒色とのコントラストは弱くなるし、鼓楼・鐘楼も黒漆を主としたものに復原されると、社殿全体の色彩構成が変わり、感覚的にも違ったものになる。

千葉県の新勝寺三重塔（1712年）も初重各面の脇間に嵌められた十六羅漢の彫刻が「洪鉄染石灰摺」⁽¹⁹⁾であったらしいという。この塔は彩色部分が多く、それに赤漆・黒漆・金箔が加わり、多彩な色で仕上げられている。新勝寺では、享保17年（1732）建立の清滝権現堂が赤漆を主として柱頭部から組物にかけて彩色を施し、建具を黒漆とした華やかな建物であり、元禄16年（1703）建立の旧本堂にも似たような塗装・彩色の跡がみられる。しかし、天保元年（1830）建立の仁王門、安政5年（1858）竣工の旧本堂、文久元年（1861）建立の額堂は塗装・彩色がされてなく、いずれも建立当初から素木であったと思われる。これらの建物は飾金具が打たれているものの、彫刻類にも彩色の跡はない。

いままで見てきたように、近世に入ると塗装・彩色を施した色彩豊かな建物が増え、特に関東地方ではその傾向が強い。しかし、江戸時代も末期になると、塗装・彩色を施さず、素木の杢目を見せた建物が多くなるようで、建物の色彩に対する人々の感覚が変化してくるようになると思われる。新勝寺でも、仁王門は従来例からすれば色を塗る建物であり、本堂も前身の元禄建立本堂を継承するものであれば当然塗るべき建物であろう。額堂はともかく、仁王門・本堂が塗られていないことは素木の建物を尊ぶ時代の色彩感覚に従ったとみてよいのだろう。三重塔にみられた「洪鉄染石灰摺」が杢目を見せるための塗装であり、その耐用年限が短いことを考え合わせると、その次に素木の建物が出てくることは当然の帰結であるともいえる。ほかにも、江戸時代末期の建物で、彫刻装飾を豊富に備えながらすべて素木のままとしたのは、埼玉県の氷川神社本殿（1842年）や歓喜院貴総門（1851年）など例が多い。

注

- (1) 永嶋正春「額田寺伽藍並条里図に見る古代の顔料」（国立歴史民俗博物館企画展示図録『荘園絵図とその世界』所収）。
- (2) 例えば、上野国分寺跡出土瓦などがある。
- (3) 緑色の場合に、緑青ではなく藍と黄土系を混ぜて塗ると、このように変色する例（平等院鳳凰堂内部の極彩色など）がある。
- (4) 出雲大社では大永4年（1524年）に神宮寺が造られたが、寛文4年（1664年）の造替時に破却された。
- (5) 『一遍上人絵伝』に描かれた寺社をみると、たとえば金剛峰寺では壇上伽藍が左右逆転して描かれている（右から左へ話が展開するのに合わせたのかもしれないが）し、善光寺本堂の形式なども後身の現本堂とは違いすぎるなど、問題点が多い。
- (6) たとえば、『一遍上人絵伝』では本殿側面の造り合い部分が吹放しであったり、方形二重塔であるはずの大塔が一般形式の多宝塔であったりして、史実に合わない点がある。
- (7) 中央公論社『続日本の絵巻24』所収の小松茂美の解説による。
- (8) 『重要文化財八坂神社本殿修理工事報告書』（1964年）による。
- (9) 拙稿「御影堂と阿弥陀堂」（『日本の仏教三』1989年、新潮社 所収）参照。

- (10) 参考, 国立歴史民俗博物館企画展示図録『日本建築の装飾彩色』(1990年)。
- (11) 『重要文化財戸隠神社本殿修理工事報告書』(1988年) 参照。
- (12) 『重要文化財豊歳神社本殿修理工事報告書』(1987年) 参照。
- (13) 『^{寛永度}南宮神社史卷三^{寛永度}上』(1945年, 南宮神社) 所収。後出の「三重之塔注文」も同じ。
- (14) 『重要文化財久能山東照宮^{第一期}修理工事報告書第一集』(1968年) による。なお, 「土朱塗」については, 日光東照宮の『寛永御造営帳』をはじめほかの神社の古記録にもみられ, 日光東照宮社殿の修理工事の際に建物に残されていた古い顔料を分析調査した結果, 弁柄系のものと断定されている。『重要文化財東照宮^{神楽殿・上中下神庫・御旅所社殿・仮殿鐘楼}その他修理工事報告書』(1967年) 参照。
- (15) 『重要文化財二荒山神社本殿修理工事報告書』(1965年) によると, 当初は丹塗りで, 次に土朱塗となり, そのあと弁柄漆塗りになったらしいという。
- (16) 『国宝輪王寺大猷院靈廟本殿・相之間・拝殿修理工事報告書』(1966年) による。
- (17) 『重要文化財妙義神社^{本殿・幣殿・拝殿, 附神饌所, 附透塀, 唐門, 総門}修理工事報告書』(1988年) による。
- (18) 『重要文化財経蔵・鼓楼・鐘楼修理工事報告書』(1975年) による。
- (19) 上記(17)と同じ。

(国立歴史民俗博物館情報資料研究部)

Coloring of Japanese Architecture

HAMASHIMA Masaji

The building of Japanese temples and shrines are given various coatings and colorings as a part of their ornamentation. How many colors and what kinds of pigments did they use? How did they combine such colors and pigments? How great are the differences in colors and pigments between the kinds of architecture or the periods when they were built? How are the colors arranged among the neighboring buildings on the same site? I will survey the above issues by tracing their development, mainly through picture materials in ancient times (generally, Nara and Heian period, but sometimes including Yamato Court period) and in the middle ages (Kamakura, Muromachi and Azuchi-Momoyama periods) and through remaining buildings in the modern ages (Edo period). Also, I would like to discuss, I survey the Japanese feeling for color in architecture.



写真1 浄土寺多宝塔



写真2 戸隠神社本殿

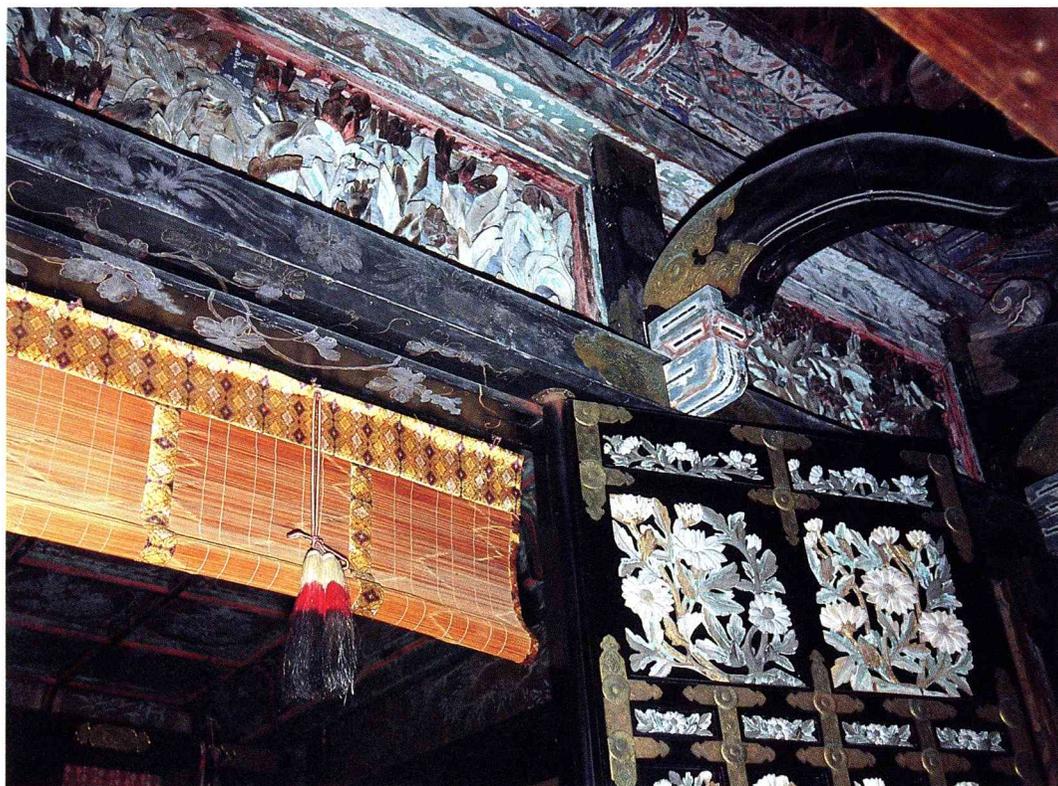


写真3 都久夫須麻神社本殿



写真4 西本願寺唐門



写真5 六所神社楼門



写真6 同本殿幣殿拝殿



写真7 大猷院靈廟仁王門



写真8 同水屋



写真11 大猷院霊廟拝殿相の間



写真12 同本殿



写真13 大猷院靈廟皇嘉門



写真14 同奥院拝殿

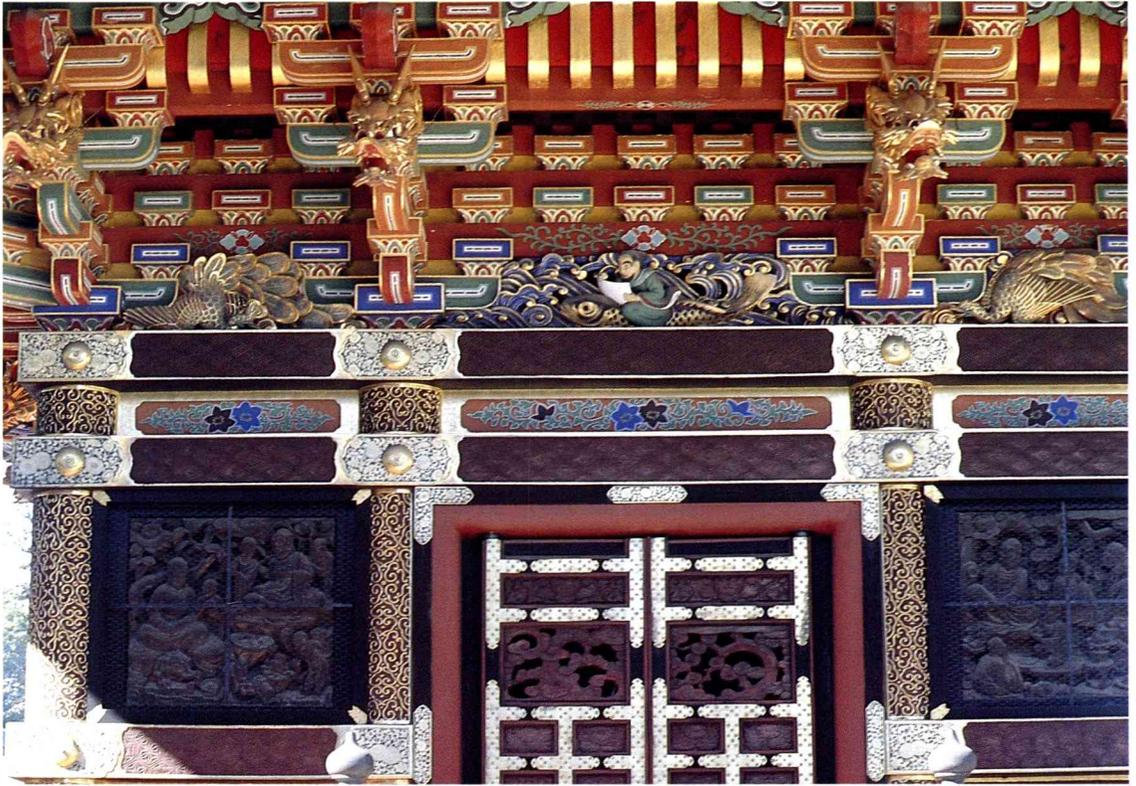


写真15 新勝寺三重塔



写真16 同積迦堂